

三島由紀夫『豊饒の海』の小説構造可視化

谷口敏夫

1 はじめに

三島由紀夫の長編『豊饒の海』は、『春の雪』『奔馬』『暁の寺』『天人五衰』の全四巻で構成されている。これらの各巻についてはすでに2001～2004年にかけて分析^{*1}をすませた。しかしその分析は各巻のものであり、巻次継承の前後のつながりについては言及したが、未だ全四巻をまとめて考究したことはなかった。

本論は『豊饒の海』をまとめた一冊の長編として捉え、その作品構造の全体を見直したものである。手法は従来と同じくKT2システムによって構造を可視化した。

2 実験・調査の目的と方法

本論は長編小説の全体構造を登場人物、および鍵語(重要語)によって可視化し読み解き、把握することである。このことから、小説構造や流れが理解でき、作品のより深い鑑賞を可能とする。方法は、従前使ってきたKT2システムでの文章内位置付き用語抽出を基本にし、等高線グラフで文章地図をつくり、クラスター分析を行った。これらは過去の分析で詳しくのべた。

調査に使ったテキストは全四巻を新潮社文庫によった。各巻の様子は、

第一巻『春の雪』総頁数405全55章構成。四百字原稿用紙換算784枚(405頁×18行×43字)。

第二巻『奔馬』総頁数440全40章構成。四百字原稿用紙換算851枚(440頁×18行×43文字)

第三巻『暁の寺』総頁数368全45章、二部構成。四百字原稿用紙換算712枚(368頁×18行×43字)、

第一部は1～22章でタイとインドが舞台。

第二部は23～45章で東京と御殿場の富士山が見える別荘が舞台となる。

第四巻『天人五衰』総頁数299全30章構成。四百字原稿用紙換算579枚(299頁×18行×43字)。

以上から全四巻『豊饒の海』は四百字原稿用紙換算で2926枚、おおよそ3千枚の長編小説である。

3 文章地図

表1に、KT2システムで作品から抽出した用語のうち、頻度数46以上のものを202例あげた。全異なり語数が21692件あったので、表1は全体の上位0.93%を扱うこととなる。これを概括すると、人物名が上位から数えて、{本多、清頭、勲、聡子、透、飯沼、慶子、ジン・ジャン、蓼科、槇子}と頻度数が200以上の人名だけで10名が現れ、しかもこの10名にはいわゆる主役と重要な脇役がすべて含まれている。『豊饒の海』は人の転生をテーマにしているので、全四巻にわたって本多茂邦が登場し、明治、大正、昭和を通じて松枝清頭の転生を確認するというのが太い骨格となっている。もちろん各巻にそれぞれの転生者らしき人物が登場する。

『春の雪』の発端は松枝清頭と綾倉聡子との悲恋だった。これが『奔馬』では飯沼勲の政治的蹶起につなが

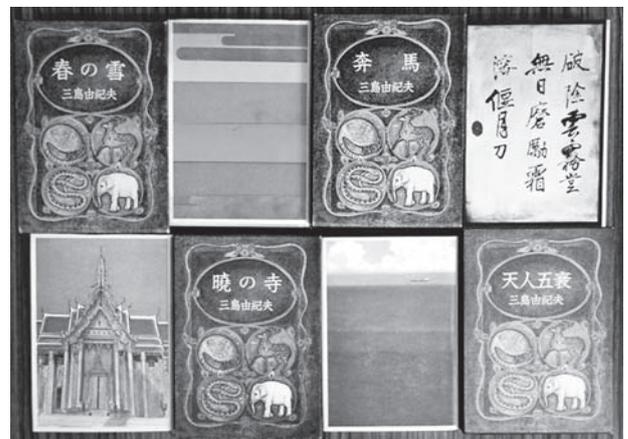


図1 『春の雪』『奔馬』『暁の寺』『天人五衰』新潮社、昭和44～46年。単行図書

*1 谷口敏夫『春の雪』の小説構造可視化、京都光華女子大学研究紀要、39(2001/12)

谷口敏夫『奔馬』の小説構造可視化、京都光華女子大学研究紀要、40(2002/12)

谷口敏夫『暁の寺』の小説構造可視化、京都光華女子大学研究紀要、41(2003/12)

谷口敏夫『天人五衰』の小説構造可視化、京都光華女子大学研究紀要、42(2004/12)

り、『暁の寺』では来日中のジン・ジャンの放埒、最終巻『天人五衰』では本多の養子になった安永透へと因果が巡る。

前後するが、蓼科、楨子、慶子はそれぞれ特徴的な女性として描かれている。蓼科は綾倉聡子付の老女だが、綾倉家や公家全般の表裏を知り尽くし、清顕と聡子の悲恋の見届け人でもある。鬼頭楨子は飯沼勲を弟のように可愛がる姉役で、飯沼勲を裁判から救うために偽証する。慶子は本多の友人として、転生の秘密を共有する。

特徴的な用語として、{(81) 指環、(56) 阿頼耶識、(54) 転生、(48) 神風連}などが目につく。転生の証となる「黒子」は頻度が41なので表1には含まれていない。他に海に関係する用語や、建築構造物に関する用語もある。

3. 1 用語の分類

表1から202用例を12のクラスに分類しそれを表2とした。この分類は上位語を種子にし帰納的に行ったもので、経験則に従うヒューリスティックスによった。三島由紀夫に関する各巻ごとに行った過去の分類方法と同じである。今回は全四巻をまとめて扱うので、従来の「春の雪鍵語」「奔馬鍵語」「暁の寺鍵語」および「暁・快樂」「暁・象徴」、さらに「天人五衰鍵語」を併合し、「豊饒海鍵語」としてまとめた。

この結果を見て従来の単行図書あつかいに較べて鍵語も増えたので、より精細な分類を付与するのが妥当と考え、「豊饒海鍵語」を象徴性および現実性の二つにわけた。もちろん小説という文芸作品にあつての「言葉」は殆どの場合、現実から逸脱した象徴性を色濃くもつものなので、ややもすると総て象徴的用例となってしまう。よって象徴性と現実性の境界は相対的に扱い、小説世界の中でのより象徴的、より現実的という評価をした。さらに『天人五衰』で気づいた「色彩」や「海」については、全巻を通して頻度が相当にあるので、独立した分類項目として採用した。建築構造については、『金閣寺』を含めて現実世界に確固として存在する物への写実詳細を究めた三島の流儀を考え、分類項目として建てた。例えば、旧前田家の別荘で現・鎌倉文学館は、松枝侯爵の「終南別業」としてモデル化されている。ただしこの別業の用語頻度は9なので本論では扱わない。

以下に用語の分類項目について簡単な説明を付けた。これらに含まれる用語は正規化を施していない高頻度の用例を202例抽出したものであるという制限がある。

○ 7212 人物-男

人物は上位202件の中でも34件(頻度数9783)と最大規模の分類項目になるので、これを分類視点が堅固な性別によって細分し、男性は21件となった。この結果は小説構造における登場人物の出現傾向からみて妥当であった。すなわち先頭5位までの間に主要人物がすべて現れている。これら人物の特性は名寄せを行った後に3.2で後述する。余談だが、経験的にミステリの場合、先頭5位までの出現名にいわゆる「犯人」がいる。一般に1位には探偵などの主人公が、2位にはワトソン役があてはまり、3位~4位に来るのが犯人という事例が多い。なお、以下の説明で「2529 本多」とあるのは「頻度・用語名」である。

{2529 本多、1172 清顕、945 勲、605 透、366 飯沼} この5名は、本多が全四巻に登場する転生者に対する観察者であり、『豊饒の海』全体としては本多が作品中に最も多く現れ、主人公となっている。5番目の人物頻度を持つ366 飯沼は、第二巻『奔馬』の主人公である飯沼勲の父親で飯沼茂之を指す。また飯沼勲が「飯沼」と表記されたのは5頻度に満たなかったため、名寄せの際にも誤差として無視した。

○ 2571 人物-女

人物-男に対応して女性は13件となった。そのうちの上位5位までをあげると次のようになる。{652 聡子、354 慶子、282 ジン・ジャン、278 蓼科、234 楨子}。聡子は第一巻『春の雪』の女性主人公で、かつ最終巻『天人五衰』では月修寺門跡として作品の締めくくりの役割を持っている。慶子は本多繁邦の友人となる歌人、ジン・ジャンは第三巻『暁の寺』の主人公、蓼科は聡子付の老女、楨子は第二巻『奔馬』で飯沼勲の精神的な姉役。

○ 5845 人など

この分類は、固有の人名以外を抽出した。つまり人称代名詞およびそれに準じる言葉をまとめた。「先生」などは呼びかけが多いので二人称のような使い方になっている。また「名」「顔」は人を指している場合が多いので、「人など」に含めた。

○ 4839 三島鍵語

31件挙げた。鍵語は英語でいうとキーワードの意

味を持たせている。用語のうち、その言葉集合が三島由紀夫の文体に直接関わるものを選んだ。言葉としては一般的用語であるが、三島由紀夫の作品中では独自の雰囲気を持するものであり、三島に関する何らかの言及を可能とする用語集である。

○ 2828 豊饒海－象徴

『豊饒の海』を読み解くための鍵となる用語集である。これらの言葉の集合を「象徴」と「現実」にわけ整理した。ここでの「象徴」は現実の名前を持った事象から一段階上位にあって、その元の事象そのものや他の事象を連想しながらまとめて表す言葉として抽出した。たとえば「死」は三島由紀夫のあらゆる公刊物に含まれる用語だが、とりわけ『豊饒の海』では、現実の死と転生のための死と、永劫に通じる無を象徴した死と、さらに作家自身の自死まで予測した多義性があり、それらをすべて象徴した言葉として三島が「死」を使っていると判定した結果である。

○ 1633 豊饒海－現実

「豊饒海－象徴」と対になった用語集で、具体的な現実を指すものとして抽出した。しかも『豊饒の海』を読み解く鍵となる語彙である。たとえば「裁判長」や「弁護士」という一般的な職業名も含めたが、全巻を見通す本多の職業が裁判官を辞した弁護士であり、戦後膨大な資産を得たのも弁護士活動の成功からであった。長大な『奔馬』の現実面での主題は、飯沼勲のテロについての裁判と、本多の弁護にあった。

○ 1248 色彩

スタンダールの近代小説『赤と黒』に見られる通り、あるいは漱石『それから』の白百合に見られる通り、作家が色彩を意図的に用いる事例は多い。

具体的にみると {516 白、234 黒、……} 白は死か。黒は白に対応する色として扱われている。白い正装に黒の釦や黒の靴、黒い髪や眉毛、黒い瞳、白い肌と対比が明瞭である。三島は神道を白として扱い、それが死に近く表現されている。

○ 995 建築構造

特徴的な用例は見当たらなかったが、三島作品での現実的な家屋の表現の特徴を見るために用語を抽出した。今のところ、用語の特徴は見いだせなかった。ただし学校という語が比較的高い頻度を持つのは、第一巻『春の雪』が主人公達の少年期から始まっている事による。

○ 831 海

「海」に関わる用例が全巻に特徴的にある。これは『天人五衰』の場合だと安永透の職業が双眼鏡をもって昼夜海を眺め、入出港の船を事前に通報する「信号所」職員という海を見つめる職業に由来する。だが、タイトルの『豊饒の海』とは現実の衛星「月」では、荒涼とした水のない海、渇きの海を指す。

○ 1389 現実世界

一般用語のうち精神世界に対置するもの。たとえば自然世界、現実世界に存在するものを個々に納めた。

○ 1031 心の様子

一般的な用例のうち、精神世界に関する言葉を集めた。

○ 1065 その他 省略。

●用語の傾向

表2を円グラフにしたのが図2である。これは高頻度用語202用例を分類単位の頻度数・百分率で表した。「人物－男」、「人物－女」、そして「人など」という登場人物に関わる分類項目の頻度が全体の丁度50%を占めている。人が登場するのは当たり前と思うが、長大な小説に現れる上位用語の半分が人で占められていることには、驚きを禁じ得ない。次に「三島鍵語」、「豊饒海－象徴」「豊饒海－現実」と、いわゆる三島の特徴的な語彙が30%あることが明瞭である。さらに色彩や建築構造、海に関してが15%。それ以外のもので合わせて10%という結果がでた。

この円グラフからの結論は、三島由紀夫は高頻度の使用用語の約半数を人物にあて、彼自身が造形してきた独特の用語を30%程度ちりばめ、海や色彩や建築という確実な表現のために10%、そして曖昧なその他用語を10%程度の頻度に押さえていると言える。これらの事実から、三島由紀夫のレトリックが十分に駆使されていることが明瞭である。

3.2 人物の認定

小説構造において重要な人物に焦点をあて、その名寄せを行った。この結果は表3にまとめた。すでに読解が終わっているので経験的に頻度200以上の人物名を核に、関連する頻度4以上の要素を追加し名寄せとした。人物の解説はこれまでの論『春の雪』『奔馬』『暁の寺』『天人五衰』のものを流用し加筆訂正した。

表2 用語の分類 (46 頻度以上の用語：上位 202 用例)

7212 (21 件) 人物-男	4839 (31) 三島鍵語	51 魂	1389 (16) 現実世界
2529 本多	429 女	51 観念	250 世界
1172 清顕	397 美		157 日本
945 勲	355 光	1633 (23) 豊饒海-現実	105 自然
605 透	321 言葉	146 王子	92 世間
366 飯沼	264 男	126 息子	85 時代
173 侯爵	237 花	125 手紙	80 東京
163 佐和	232 若	93 老人	73 電話
155 宮	199 少年	92 同志	70 事件
143 中尉	197 金	81 視	63 人生
125 伯爵	175 火	74 老	63 仕事
105 今西	167 愛	71 眠	62 年齢
101 殿下	155 子供	70 写真	58 酒
101 蔵原	138 悪	66 寺	58 生活
93 菱川	123 青年	62 プール	55 病気
84 井筒	119 夫人	61 裁判長	55 会話
72 克己	117 微笑	61 弁護士	63 現実
67 若様	116 匂い	59 タイ	
56 松枝侯爵	102 若者	56 月修寺	1031 (14) 心の様子
55 ジャオ・ピー	98 汗	51 シヤム	190 感情
52 相良	95 肉体	50 宮家	137 不安
50 北崎	92 罪	50 女官	106 意味
	91 美しさ	49 快樂	66 自由
2571 (13) 人物-女	88 良人	48 神風連	65 問題
652 聡子	84 危険	48 学生	60 優雅
354 慶子	81 思想	47 綾倉家	57 想像
282 ジン・ジャン	76 醜	47 裁判官	56 沈黙
278 蓼科	75 歴史		52 心配
234 槇子	61 夕食	1248 (7) 色彩	52 幸福
178 梨枝	52 秘密	516 白	52 態度
127 百子	52 行為	234 黒	46 発見
116 門跡	51 シヤツ	148 赤	46 面白
98 絹江		132 緑	46 理性
77 みね	2828 (25) 豊饒海-象徴	98 青	
59 姫様	411 死	68 黄	1065 (18) その他
59 月光姫	269 夢	52 紫	97 瞬間
57 椿原夫人	246 時		77 最後
	193 影	995 (8) 建築構造	75 巨大
5845 (18) 人など	146 存在	380 家	70 事実
1262 自分	144 思い出	202 部屋	63 一瞬
955 彼	124 記憶	106 椅子	62 同時
635 私	119 時間	79 学校	61 部分
530 顔	100 純粹	62 二階	56 微妙
498 僕	96 命	59 玄関	55 返事
336 二人	93 意志	55 階段	52 寒
255 人間	84 幻	52 廊下	51 中央
227 あなた	81 指環		51 空気
217 父	74 志	831 (8) 海	51 挨拶
214 彼女	72 恋	187 海	50 背後
151 名	66 認識	151 夏	50 左右
105 妻	62 滝	146 船	50 午後
104 娘	62 松	146 雲	47 時刻
100 相手	61 百合	57 波	47 今夜
71 先生	57 気配	49 青空	
68 他人	56 精神	48 彼方	
60 三人	56 阿頼耶識	47 太陽	
57 貴様	54 転生		

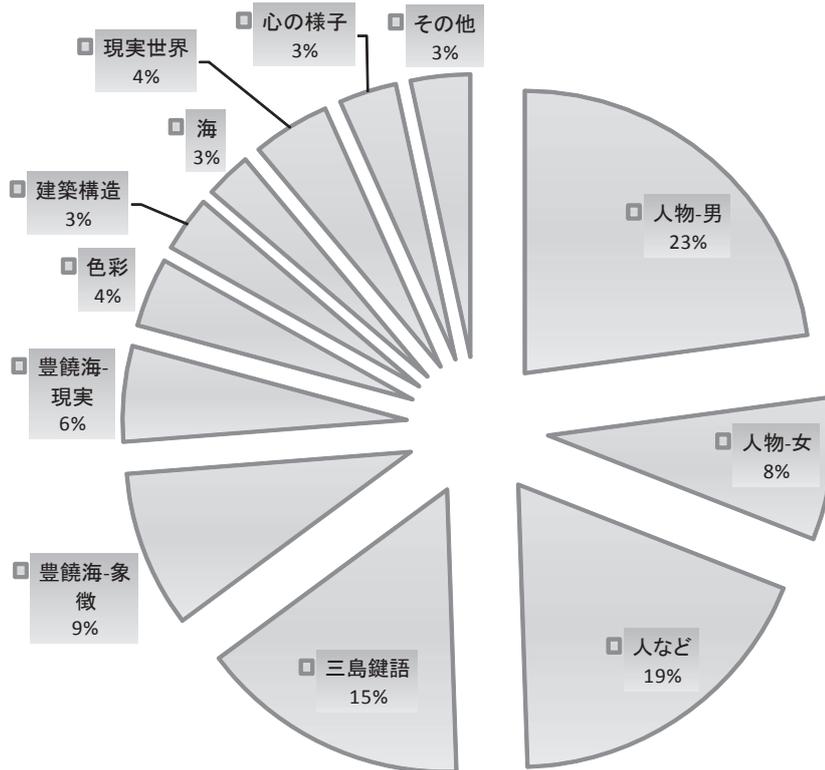


図2 『豊饒の海』用語の傾向

○本多 繁邦（ほんだ しげくに）全四巻の観察者

『春の雪』の主人公松枝清顕の友人で、『奔馬』ではその主人公飯沼勲の弁護人となる。清顕の転生を観察する全巻の主人公。松枝清顕が雅や美に対する一つの結果なら、飯沼勲は武に対する結果となる。両者は現実世界でともに矯激なまま夭折する。『暁の寺』での転生者ジン・ジャン（月光姫）の透明度は、やがて性的狂乱に落ちていく。本多は同書第一部のインド、ペナレスでそれまでの世界観が崩壊した。彼は、公園や別荘で人の情事を覗き見し、やがて透徹した認識者になる。最終巻『天人五衰』での本多繁邦は認識者であると同時に、生の理不尽、すなわち老醜にあえぐ男でもある。養子となった本多透は、繁邦を陰湿な方法で虐待し、繁邦に老醜と敗残者の思いを味わわせる。

すべてにおいて孤立した繁邦は癌の宣告を笑顔のもとに受けるが、入院手術を引き延ばし松枝の恋人だった聡子門跡の居る奈良帯解「月修寺」への旅にでた。

○松枝 清顕（まつがえ きよあき）第一巻『春の雪』主人公。

『春の雪』では主人公として終始登場する。清顕は幼なじみで年上の聡子に洞院宮治典王との婚姻勅許が

下ったにもかかわらず妊娠せしめた。その結果聡子は大阪に行き墮胎し、ついで奈良の月修寺で落飾、「強度の神経衰弱」という名目で宮家から婚約が破棄された。その間の事情に清顕は一切関わることができず、剃髪は聡子自身の手でなされた。以後、清顕は二度と聡子と対面することができなかった。

○飯沼 勲（いいぬま いさお）第二巻『奔馬』主人公
勲は『奔馬』の主人公飯沼勲をさしている。19歳で、昭和神風連たらんとし蹶起直前に捕られる。本多繁邦は勲を『春の雪』の主人公松枝清顕の転生と信じて、裁判官を辞任し勲の弁護を引き受けた。

○綾倉 聡子（あやくら さとこ）松枝清顕の恋人。
月修寺門跡

聡子は歌を家業とする格式高い羽林家綾倉伯爵の長女で、清顕より二歳年上だった。聡子と清顕は姉弟のように育った時期がある。かつて無骨だった松枝家に雅をいれるため、清顕が綾倉家に幼少時預けられたことによる。弟のような清顕は聡子への気持ちを自然に出さなかったが、聡子と宮家との婚姻勅許が下ったとき、始めて自らの恋を聡子にぶつけてくる。聡子はそれを受け容れた。

表3 『豊饒の海』名寄せ表 主要12名（頻度200以上で、各要素頻度は4以上：代表名が太字斜字）

2563	本多繁邦	11	飯沼勲	6	飯沼先生	242	鬼頭槇子
2529	本多	9	飯沼被告			234	槇子
20	繁邦	4	飯沼選手	354	久松慶子	8	鬼頭槇子
14	本多繁邦			354	慶子		
		717	綾倉聡子			229	松枝侯爵
1295	松枝清顕	652	聡子	341	ジン・ジャン	173	侯爵
1172	清顕	59	姫様	282	ジン・ジャン	56	松枝侯爵
67	若様			59	月光姫		
39	清様	605	安永透			206	洞院宮治典王
17	松枝清顕	605	透	278	蓼科	155	宮
				278	蓼科	29	宮様
988	飯沼勲	380	飯沼茂之			14	洞院宮
945	勲	366	飯沼			8	治典王殿下
19	飯沼少年	8	飯沼茂之				

○安永（本多養子）透（やすなが とおる）第四巻の（偽）主人公

本来なら第三巻『暁の寺』ジン・ジャンの転生者であるはずだった。本多は透の際だった世界観に自分と同質のものを見た。透は手を汚すことなく世界を見る若者だった。しかし義父繁邦を虐待し久松慶子から批判され、「清顕の夢日記」を読み「偽の転生者」を自覚した彼は、服毒し失明した。

○飯沼 茂之（いいぬま しげゆき）飯沼勲の父

『春の雪』で飯沼は二十四歳薩摩出身、松枝家の書生であり、清顕の家庭教師として7年勤めている。松枝侯爵のお手つき女中みねと懇ろになり、他日侯爵家を出る。二巻『奔馬』では、清顕の転生と考えられる飯沼勲の父として再登場する。国粹団体「飯沼塾」塾長となっている。

○久松 慶子（ひさまつ けいこ）本多繁邦の友人

『暁の寺』第二巻で初出。最終巻『天人五衰』では二つの役割を担う。一つは本多の友人として、そしてジン・ジャンの記憶を本多と共に持つ者として、本多から清顕と勲を含めた壮大な転生の秘密を聞く。

二つは、この事実を安永透に突きつけ、透を自滅させる役割。慶子自身は、本多の公園での覗きが世間に知られたことにより、彼との友誼を絶つ。

○ジン・ジャン（月光姫）第三巻『暁の寺』主人公

ジン・ジャンに松枝清顕と飯沼勲の転生の証となる三星の黒子はあった。本多は別荘書斎の覗き穴から若いジン・ジャンの裸身を盗み見た。その成人したジン・ジャンと第一巻でのジン・ジャンとは別人である。かつて『春の雪』ではシャムから留学しているパッタナ

ディッド殿下の恋人としてジン・ジャン（月光姫）が本国にいた。しかし死別した。パッタナディッド殿下は末娘にその昔の恋人の名をつけた。その娘が終戦後の日本に留学し、本多と再会していた。

○蓼科（たてしな）綾倉聡子の老女

蓼科は綾倉家の京都時代から四十年も仕えた老女であり聡子の守り役である。その守り役たる老女が、なぜ宮家に嫁ぐことの決まった聡子を清顕の求めに応じて逢瀬をしつらえたのか。蓼科の手引きによって清顕は聡子との悲恋に直面し、また蓼科によって書生飯沼は女中みねとの間に飯沼勲（第二巻『奔馬』主人公）をもうける。

「実際蓼科の役目は聡子を悪から護ることにあった筈だが、燃えているものは悪ではない、歌になるものは悪ではない、という訓えは綾倉家の伝承する遠い優雅のなかにほめかされていたのではなかったか？」（『春の雪』37章）

蓼科は公家文化・都風を体現した存在で、本多繁邦が観る人・観察者なら、蓼科は実効行為の介添者であることによって作品世界を展開させる。

○鬼頭 槇子（きとう まきこ）歌人、飯沼勲の姉代わり

第二巻『奔馬』で軍人歌人鬼頭中将の娘として登場する。離婚歴のある三十代半ばの歌人。勲らの蹶起を事前に飯沼茂之（勲の父）に漏らす。勲とは姉弟の間柄だったが、やがて明確な恋人となった。さらに勲の裁判では偽証し勲を救う。第三巻『暁の寺』では女流歌人として大成している。本多は御殿場の別荘で書斎の覗き穴から槇子の弟子椿原と今西の情事を見る。そこに横から二人の痴態を見つめる槇子のまなざしも見た。

「本多はふたたび槇子を見た。槇子はその白銀に光る白髪をたゆたわせ、自若として見下ろしていた。性こそちがえ、槇子が自分と全く同じ人種に属するのを本多は覚った。」(『暁の寺』27章)

○松枝 侯爵 松枝清顕の実父

松枝清顕の父親。綾倉伯爵とともに、婚姻勅許の下った綾倉聡子と子息清顕との不始末を尻ぬぐいする。

○洞院宮 治典王 (とういんのみや はるのりおう)

かつての、綾倉聡子の婚約者。『奔馬』では堀中尉と親しい。陸軍青年将校に人望がある。

4 クラスタ分析

長編小説に関するクラスタ分析の適用はすでに2001～2004年にかけて『春の雪』『奔馬』『暁の寺』『天人五衰』の小説構造可視化でのべた(*1参照)。本論では個々を閉じられた作品としてでなく、全四巻をまとめて分析した。これによって個々の重要語の頻度を全体の中で相対的に見ることができる。以下それに用いた人物及び鍵語は、それぞれ「3.1用語の分類」、「3.2人物の認定」で得たものを勘案し選定した。人物は名寄せした表3の代表名で12名の総てを選んだ。事項名としては表2から「豊饒海-象徴、豊饒海-現実、色彩、建築構造、海」の5鍵語群を選んだ。

4.1 人物と鍵語のクラスタ分析

図3は、主要登場人物と鍵語の関係をクラスタ分析し樹図(デンドログラム)を描いたものである。手法はユークリッド距離およびウオード法によった。鍵語を群としてあつかい、個々の要素への重み付けは行わなかった。このデンドログラムによって、17件の人名・事項項目の並びを決定したことになる。

以下、図3を解釈してみる。

(1) 本多繁邦 {松枝清顕、綾倉聡子}、飯沼勲

図3では、{本多繁邦}が他の16人名・事項項目をすべて統括しているのが明瞭である。本多は他の何者からも突出した役割「転生の証人」あるいは「観察者」として、全四巻を統括している。

次に、{松枝清顕、綾倉聡子}は対を形成している。これは『春の雪』の主題である禁じられた恋、そして恋人同士であるから、これだけ明瞭なクラスタを造

るのも当然である。さらに、本多および清顕・聡子以外の、他の総てを統括する{飯沼勲}クラスタが特徴的である。

以上まとめると、図3からは次の幹となるクラスタ関係が明らかである。

本多繁邦 {松枝清顕、綾倉聡子}、飯沼勲

このクラスタ形成からは、他の巻の主人公、つまり転生に関わる人物として、『暁の寺』でのジン・ジャン、『天人五衰』での安永(本多)透がより下層に位置するが、小説全体からみて、清顕や聡子や勲に比較できるだけの重みはないので、この幹となったクラスタで妥当と考える。

(2) 安永透 {豊饒海-象徴、{色彩、海}}

安永は小説感動の面からは読者によって意見がわかれようが、しかし全四巻の結構から考えると、二十になって服毒自殺をしても死なず、ただ盲目となった偽の転生者であることにより、輪廻転生を飛び越えた虚無への突抜を可能とした鍵人物といえる。勿論他方、あまりに現実的な人物とも言える。

安永のもとに『豊饒の海』での象徴語と、そして特に安永が登場する『天人五衰』で関連の強い{色彩、海}がクラスタの要素となっていることが明瞭である。透の職業は海と船とを観察する見張人であった。

(3) {飯沼茂之、鬼頭槇子、蓼科、松枝侯爵、洞院宮 治典王}

この5名の人物は、それぞれの小クラスタにそれぞれの意味を読み取れるが、全体関係からいうと、いわゆる脇役である。

(4) {{久松慶子、ジン・ジャン}、{豊饒海-現実、建築構造}}

久松慶子が、豊饒海-現実という小説全体に関わる鍵語とクラスタを形成したのは、本多の心に秘めた清顕、勲、ジン・ジャンの転生の軌跡を慶子が知ったこと、およびジン・ジャンの転生の黒子を目撃したことからである。慶子とジン・ジャンは富士の見える別荘で濃密な性的関係を持ち、別荘という建築物の火災によって総てが灰燼に帰し、『暁の寺』は終了した。慶子は最後に透が偽の転生者であることを本人に告げた。

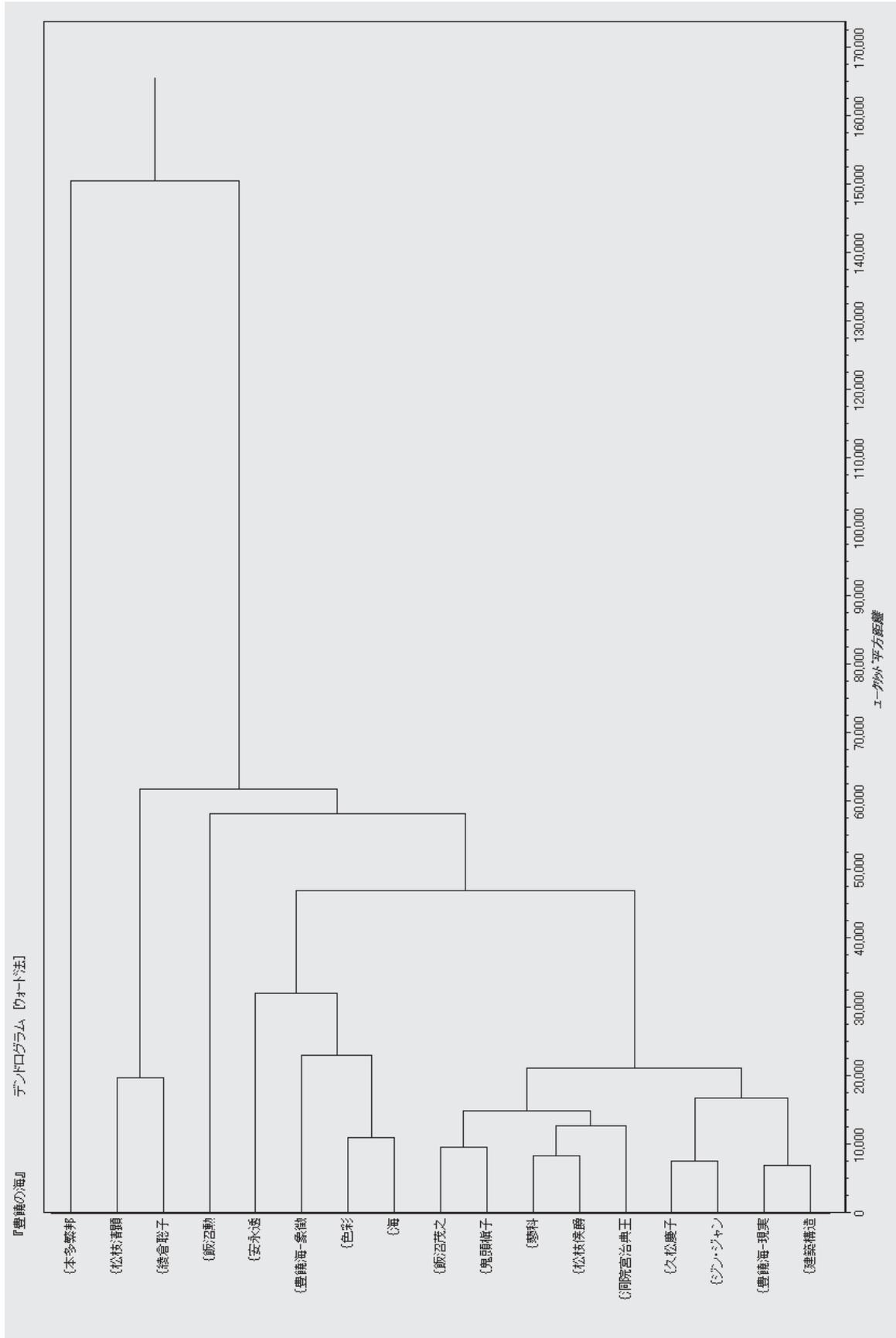


図3 事項・人物のクラスター分析

4. 2 『豊饒の海』 文章地図

これまでの記述で『豊饒の海』から登場人物、鍵語を選定し個別に解釈を加えた。ここではクラスター分析の結果としてあらわれた、人物や鍵語の並びを文章地図に応用した。すなわち用語の縦軸配置（横軸配置は章の時系列）をクラスター間の類縁によって得た。この結果を図4-1～図4-4に載せた。

●地図の梗概

まず全体としてみると、通時的に一貫して登場する人物は本多繁邦であり、これは転生の観察者として主人公の形を取る。鍵語は「豊饒海-象徴」が満遍なく各巻章に現れてくる。各巻では本多繁邦以外に、『春の雪』では松枝清顕、その恋人綾倉聡子、その二人を手引きする綾倉家の老女「蓼科」がいる。本多は清顕の親友として登場する。これらは共起のパターンが明瞭に現れている。『奔馬』では主人公の飯沼勲が強いパターンを見せる。そして『春の雪』では聡子の婚約者として淡く登場した洞院宮治典王が『奔馬』32章で高い頻度を持つ。これは本多が治典王に会って昭和神風連の善後策を相談した章である。また鬼頭楨子という、勲の姉役の女性が勲の裁判で偽証し、一時的に勲を罰から救った。この裁判では本多が裁判官を辞し勲の弁護士となり楨子を証人に立たせた。これらの関係が共起パターンとして文章地図に明瞭である。

『暁の寺』は二部構成をとり、第一部で本多のタイとインド旅行および輪廻転生と唯識論の考察が占めている。後半では巻・主人公にあたるジン・ジャンと、本多の友人として久松慶子が登場する。慶子とジン・ジャンとの通時的・共時的なパターンは明瞭である。『天人五衰』は巻・主人公が安永透だが、この章は本多繁邦が長きにわたる観察者の立場から、小説全体の主人公に変化する章である。透が偽の転生者だったことを確認した本多は、奈良の帯解・月修寺に（聡子）門跡を訪ね、そこで生（せい）の空、虚無を体験し小説が完了する。ただし全巻を対象にしたとき、この最重要の最終45章はあらゆるパターンを表さない。これは、全巻章にくらべて最終章の文章量が極端に少ないからである。

以上が全四巻における文章地図の概略である。すでに2001～2004年にかけて四巻をそれぞれ調査し一定の結果を得たが、今回は全四巻をまとめて調べるので、これまでの各巻評価とは異なってくる。それは、一つ

の巻の中での重要語の頻度や関係が全体の中で見たときには必ずしも同じ意味があるとは限らず、全巻にわたる文章量での重要語頻度の絶対量と相対量との違いによって、視点に変化が生じるからである。

以下の図4-1～4-4は、図3「人物・事項のクラスター分析」による人物・鍵語（本多繁邦～建築構造）の順にならべた文章地図である。最下部の0103や0155という表記は「巻+章」のことで、それぞれ第一巻の3章、第一巻の55章の意味を持つ。

(1) 第一巻『春の雪』 図4-1

通時的に見ると「本多繁邦、松枝清顕、綾倉聡子」の3名は01章～55章まで間断なく登場するが、本多は14～27章および36～52章まで不在になる。この間「松枝清顕、綾倉聡子」だけが対となって登場するのは、二人の恋愛やその内面描写にあっては、観察者本多が小説構造からして不要だからと言える。

共時的に見ると「本多繁邦、松枝清顕、綾倉聡子」の3名は34章で強い共起を示している。ここでは「豊饒海-象徴、色彩、海」も共起するので、34章は『春の海』の中核的章と考えて良い。以下に原文を引用しておく。まず、清顕の夢があった。

そのとき野中の道を、遠くから、自分と同じ白装束の一人が来るのが見られた。かれらは肅々と進んで来て、一、二間先に立止った。見ればおのおのが、手につややかな榊の葉の玉串を携えている。

清顕の身を潔めるために、かれらは清顕の前でその玉串を振り、その音がさやかに響いた。

かれらの一人の顔に、清顕はありありと、書生の飯沼の顔を見出しておどろいた。しかもその飯沼が口をひらいて、清顕にこう言ったのである。

『あなたは荒ぶる神だ。それにちがいない』

清顕はそう言われて自分の身をかえりみた。いつのまにか、くすんだ藤いろや茜いろの勾玉の頸飾が、自分の頸にかけられていて、その石の冷たい感触が、胸の肌にはひろがっていた。しかも自分の胸は、平たい厚い巖のようであった。（『春の雪』34章）

清顕のこの夢は荒ぶる神としての第二巻『奔馬』飯沼勲誕生（清顕の転生）の予兆である。

次は、清顕と聡子の禁断の恋愛過程があった。

— 深夜聡子を鎌倉に連れてきて、味爽に東京へ連れ戻すには、馬車ではいけない。汽車でもいけない。まして人力車では叶わない。どうしても自動車が必要なのである。

それも清顕の周辺の家庭の自動車ではいけない。まして聡子の周辺の自動車ではいけない。顔も知らず、事情も知らぬ

運転手が、運転する車でなくてはならない。

ひろい終南別業のうちとは云いながら、聡子と王子たちと顔を合せてはならない。王子たちは、聡子の婚約の事情を御存知かどうかは知れないが、顔を見分けられれば厄介の種子になるに決っている。

これだけの困難をくぐり抜けるには、どうしても本多が働いて、馴れない役を演じなければならなかった。彼は友のために、女を連れて来て連れ戻す約束をしたのである。（『春の雪』34章）

清顕と聡子の鎌倉「終南別業」に近い海辺での情事に、親友本多が往復とも自家用車で聡子の恋人（房子と名乗らせる）として付き添った章である。ここで、聡子は本多に「罪を感じていない」「いずれ終わる」「覚悟して清顕と逢っている」という心理深奥を伝える。聡子が明確に本多に気持ちを伝えたことで、清顕と聡子と本多とが共犯者になったといえる。

『春の雪』では他に「綾倉聡子、蓼科」が37章で強い共起を見せている。

二人が相会うときの目のかがやき、二人が近づくときの胸のときめき、それらは蓼科の冷え切った心を温めためるための煖炉であるから、彼女は自分のために火種を絶やさぬようになった。相見ることまでの憂いにやつれた頬が、相手の姿をみとめるやいなや、六月の麦の穂よりも輝やかしくなる……その瞬間は、足萎えも立ち、盲らも目をひらくような奇蹟に充ちていた。

実際蓼科の役目は聡子を悪から護ることにあった筈だが、燃えているものは悪ではない、歌になるものは悪ではない、という訓えは綾倉家の伝承する遠い優雅のなかにほめかされてきたのではなかったか？（『春の雪』37章）

以上の引用によって、34章では清顕の夢と、綾子との鎌倉「終南別業」での逢瀬の描写に優れ、文章地図でもこの章の重要性を明瞭に表していることがわかる。また、聡子と蓼科が共起する37章を事例に、蓼科という奥女中が本多と同じく介添者、媒介者という特殊な立場を占めていることも分かる。蓼科の感性の深奥には「歌になるものは悪ではない」という深い文化概念が隠れていた。

(2) 第二巻『奔馬』 図4-2

通時的に『奔馬』の飯沼勲は10章～40章の間、高い頻度で登場する。1～8章までは本多繁邦が勲の不在を埋めている。4章で19歳の勲が僅かに顔を出すのは、大神神社での在郷軍人会剣道奉納試合に出場したのを、38歳の本多が垣間見た場面である。

共時的に特徴的なのは37章での「本多繁邦、飯沼勲、豊饒海－象徴、海、飯沼茂之、鬼頭槇子、豊饒海－現実、建築構造」が共起することである。特に「本多繁邦、飯沼勲、鬼頭槇子」の3人物の共起は目立って高い頻度である。この37章は飯沼勲の蹶起に対する殺人予備罪などの裁判を描いている。無垢な勲を偽証してまで救おうとする鬼頭槇子の描写は秀逸である。裁判官を辞めて勲の弁護に入った本多は、証人として槇子を立てたが、槇子が事件当時の日記を読み上げ、勲の無罪を証明するくだりが槇子の偽証と分かっているのは、当事者の槇子と勲だけで、本多はそれを薄々察しはするが、分からない状態であった。

－本多はというと、実のところ本多も、槇子の日記の記述をそのまま信じていたわけではなく、裁判官がこの日記の証拠能力を無条件にみとめると信じていたわけでもなかった。ただ本多は勲が決して槇子を偽証罪に陥れるようなことはしないと信じていた。勲を救おうという槇子の一念は、勲にも明らかな筈だからである。

彼は被告と証人の間に、この戦いを提起することを望んだのである。すなわち、勲の考える純粹透明な志の密室を、思いつめた女の感情の夕映えの紅で染めなすこと。相手の世界をお互いに否定し去るほかはないほど、相互のもっとも真実な刃で戦わせること。この種の戦いこそ、勲が今までの二十年の半生に、想像だにせず、夢見ることさえなく、しかも或る「生の必要」から必ず知らねばならないところの戦いだった。

勲は自分の世界を信じすぎていた。それを壊してやらねばならぬ。なぜならそれはもっとも危険な確信であり、彼の生を危うくするものだからである。（『奔馬』37章）

飯沼勲の至誠を、姉役の鬼頭槇子は偽証によって破壊し、現実の罰から勲を逃そうとする。しかし、勲は自分が助かり、仲間を裏切った形になったとしても、槇子を偽証罪に持ち込むことはできない。純粹透明な気持ちを持った人間が、どういう風に振るまい、そして後日に決着を付けるのかという点で、この37章は第二巻の核となる章である。

(3) 第三巻『暁の寺』 図4-3

第三巻『暁の寺』は二部構成で、第一部が1～22章で本多のタイ、インド旅行。第二部が23～45章で富士の裾野・御殿場の本多別荘が舞台となる。通時的に一部、二部共に本多は間断なく登場するが、一部の13～19章の間に空隙が生じる。この部分は、19章の「豊饒海－象徴」の出現で象徴されているが、本多自

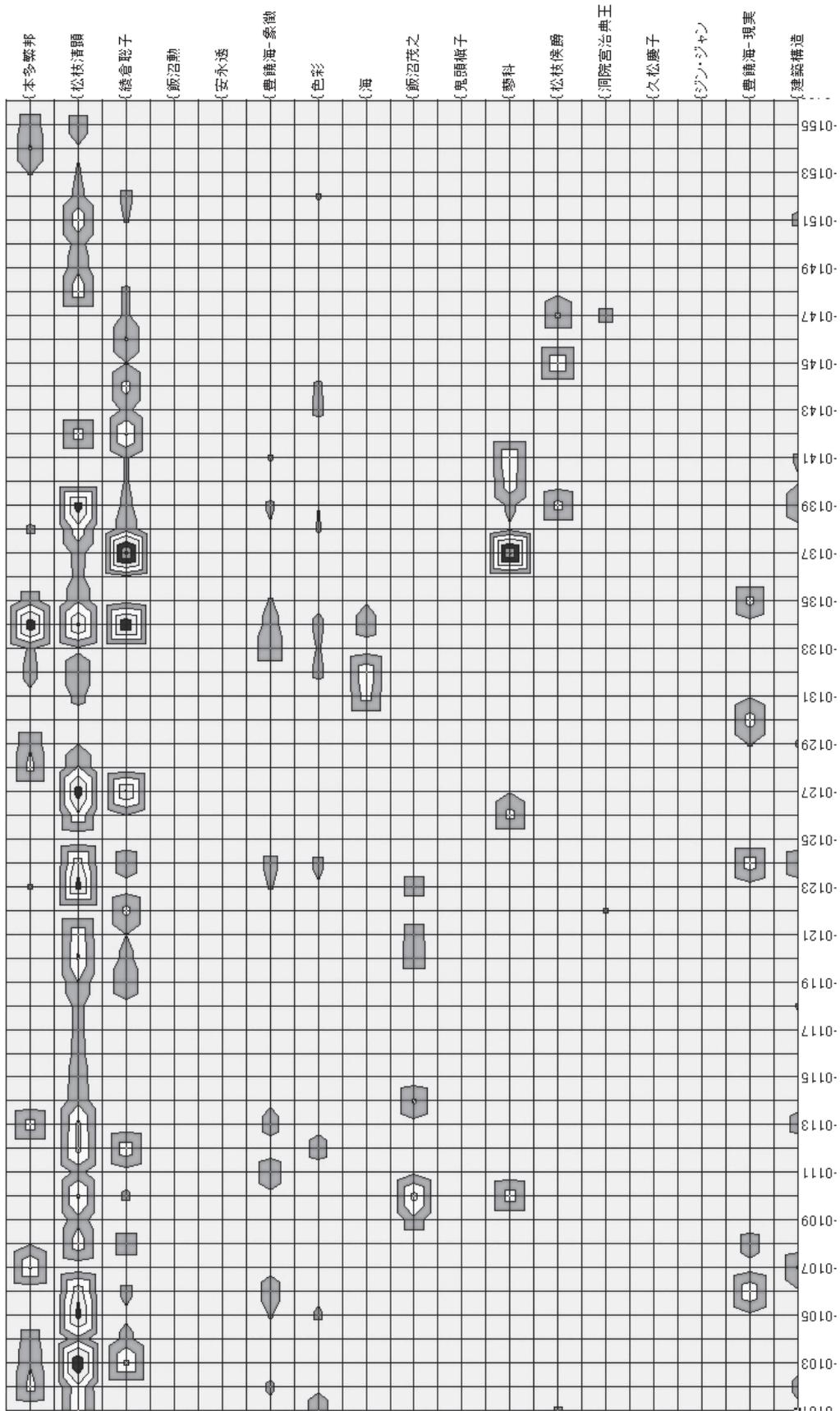


図4-1 文章地図・第一巻「春の雪」

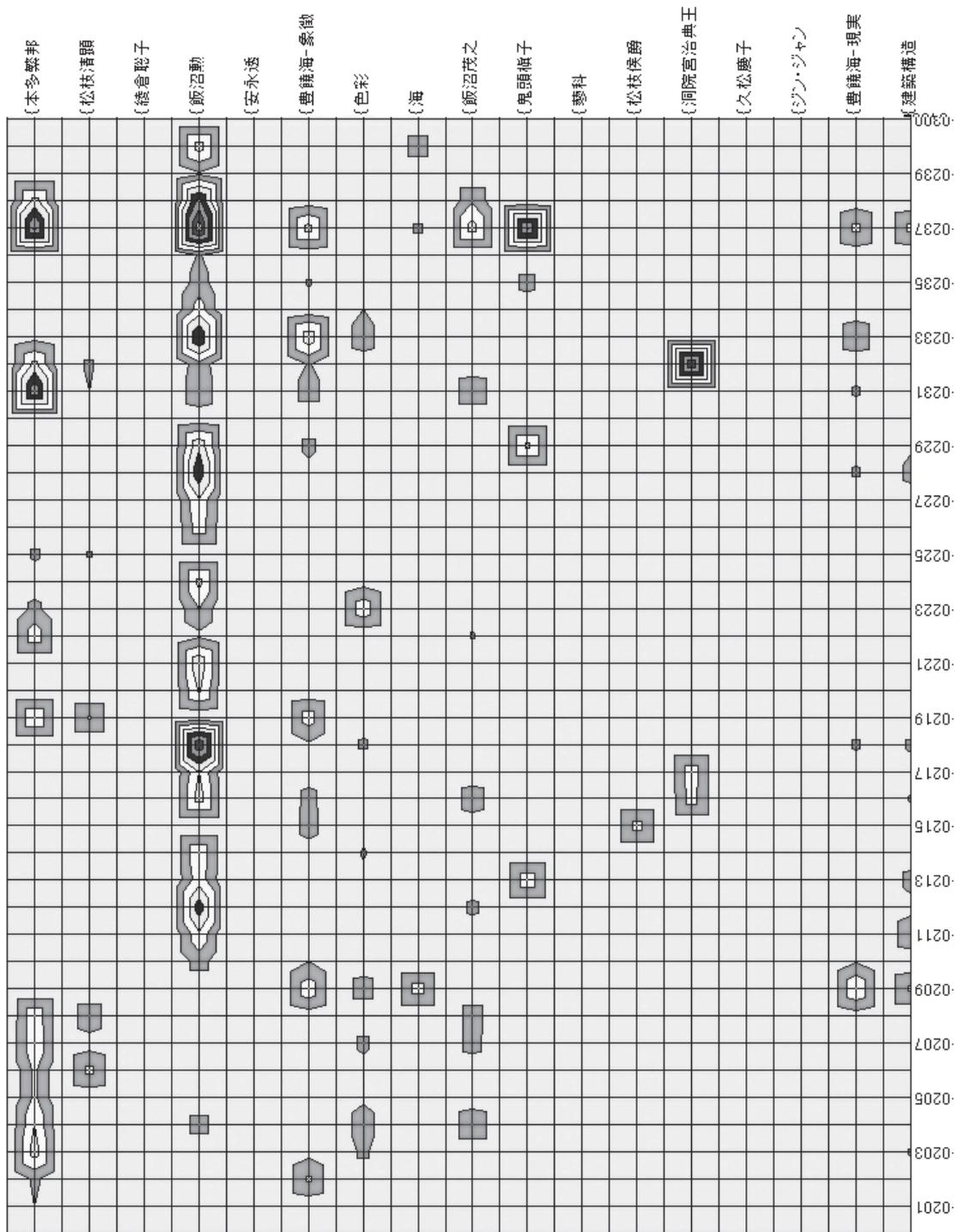


図 4-2 文章地図・第二巻「奔馬」

身の考える輪廻転生・唯識論への考察があって、いわゆる一般的な小説結構からは外れている。

次に共時的には、すでに図3のデンドログラムによって、{久松慶子、ジン・ジャン}の明瞭なクラスター形成に注意を向けたが、この文章地図・図4-3によって、第二部での慶子とジン・ジャンの共起は明瞭である。さらにジン・ジャンは清顕→勲の生まれ変わりとしてのめかされながらも、その登場は第二部まで延ばされ、主要人物であるよりも慶子との同期によってジン・ジャンが存在しているように見える。つまり第三巻の本多の通時的登場でわかるように、この巻では観察者本多繁邦の存在が大きい。あまりに清顕や勲の生の輝きが強烈すぎた、そういう祭りのあとの、美姫ジン・ジャンであった。

パターンとして最も明瞭な44章をみってみる。ここでは{本多繁邦、豊饒海-象徴、色彩、久松慶子、ジン・ジャン、豊饒海-現実、建築構造}と、おおよそ『暁の寺』に登場する人物・事項はすべて共起している。さらにこの章は二つに分かれ前半は本多が書斎の覗き穴から隣室の慶子とジン・ジャンの絡まった肢体を覗き、そこにジン・ジャンの脇下の三つ星黒子を確認する部分。後半は退廃の象徴としての本多の別荘が突然の業火で燃え尽きること。

このときジン・ジャンは、慶子の腿が自由な動きに委ねられているのを嫉妬してか、その腿をもわがものにしようとして、左腕を高くあげて慶子の腿をつかむと、自分の顔の上へ、もう息をしなくてもすむように、しっかりと宛がった。慶子の白い威ある腿がジン・ジャンの顔を完全に覆うた。

ジン・ジャンの腋はあらわになった。左の乳首よりさらに左方、今まで腕に隠されていたところに、夕映えの残光を含んで暮れかかる空のような褐色の肌、昂を思わせる三つのきわめて小さな黒子が歴々とあらわれていた。

……本多はおのれの目を矢で射貫かれたような衝撃を受けた。

頭をずらして、書棚から身を引こうとした。

そのとき背を軽く叩かれたのである。

書棚の穴から頭を抜いた本多は、寝間着の梨枝が険しい目つきで、おそろしいほど蒼い顔をして佇んでいるのを見た。
([『暁の寺』44章])

ジン・ジャンにはたしかに転生の証といえる三つ星の黒子があった。しかも本多はそれを「覗き」によって確認し、その現場を妻の梨枝に見とがめられた。一部では唯識を深め、二部では美姫ジン・ジャンが勲の転生者かもしれない幻想の中で、覗きを妻に見られる

という実に現実的な冷水を本多は浴びた。これは第四巻の本多が遭遇した現実面での予兆だったかもしれない。

(4) 第四巻『天人五衰』 図4-4

第四巻『天人五衰』は四巻の中では最小の30章構成であることに特徴がある。長編小説の醍醐味とも言える重量感、ボリュームからするとあばら骨が鮮やかに見える瘦身と言える。小説としても、巻の主人公のはずと思えた安永透(養子となり本多に改姓)が、本多の半生かけて観察してきた清顕や勲やジン・ジャンの転生者ではないことが判明する。つまり空虚さを描くための巻とも言える。しかし転生という本多の半生の夢を消滅させてこそ、「生」の実態を深く味わわせる効果があり、作品としてはなくてはならない「最重要巻章」である。

通時的には{本多繁邦、安永透、豊饒海-象徴、色彩、海、久松慶子}の6項目がそれぞれ間断なく現れている。

共時的には、事項としての{豊饒海-象徴、色彩、海}が17~23章をのぞいて共起が強い。この17-23章とは本多繁邦が安永透を上流階級の本多透に変えていく教育期間である。象徴性があるとするなら、三島が他の作品でよく用いた、人の心や姿の美醜や、選ばれた者の世間に対する目眩ましなどであり、透を奈落に突き落とす実に現実的な前段階であって、{豊饒海-象徴、色彩、海}に代表される幻想の『豊饒の海』とは隔絶した趣がある。それを描くことが三島由起夫の意図だったことは明白である。

特異な共起パターンとしては、26章での{本多繁邦、安永透、豊饒海-象徴、色彩、豊饒海-現実}の共起がある。ここで本多と透の共起頻度が最大になっている。

「あと半年の辛抱。半年の辛抱」

と呟いていた。

「あと半年の辛抱。……もしあいつが本物なら……」

しかし思いついたこの留保条件が本多を戦慄させた。透が満二十一歳になるまでの半年の間に死んでくれれば、すべてを恕してやることができる。それを知らずに今尊大ぶっている若者の酷薄には、それを知っているということだけで、本多も辛うじて耐えることができる。が、もし透が贖物だったとしたら……

透の死を思うことが、このごろの本多を慰めて来たことは多大なものだった。屈辱の底にこの若者の死を念じ、心です

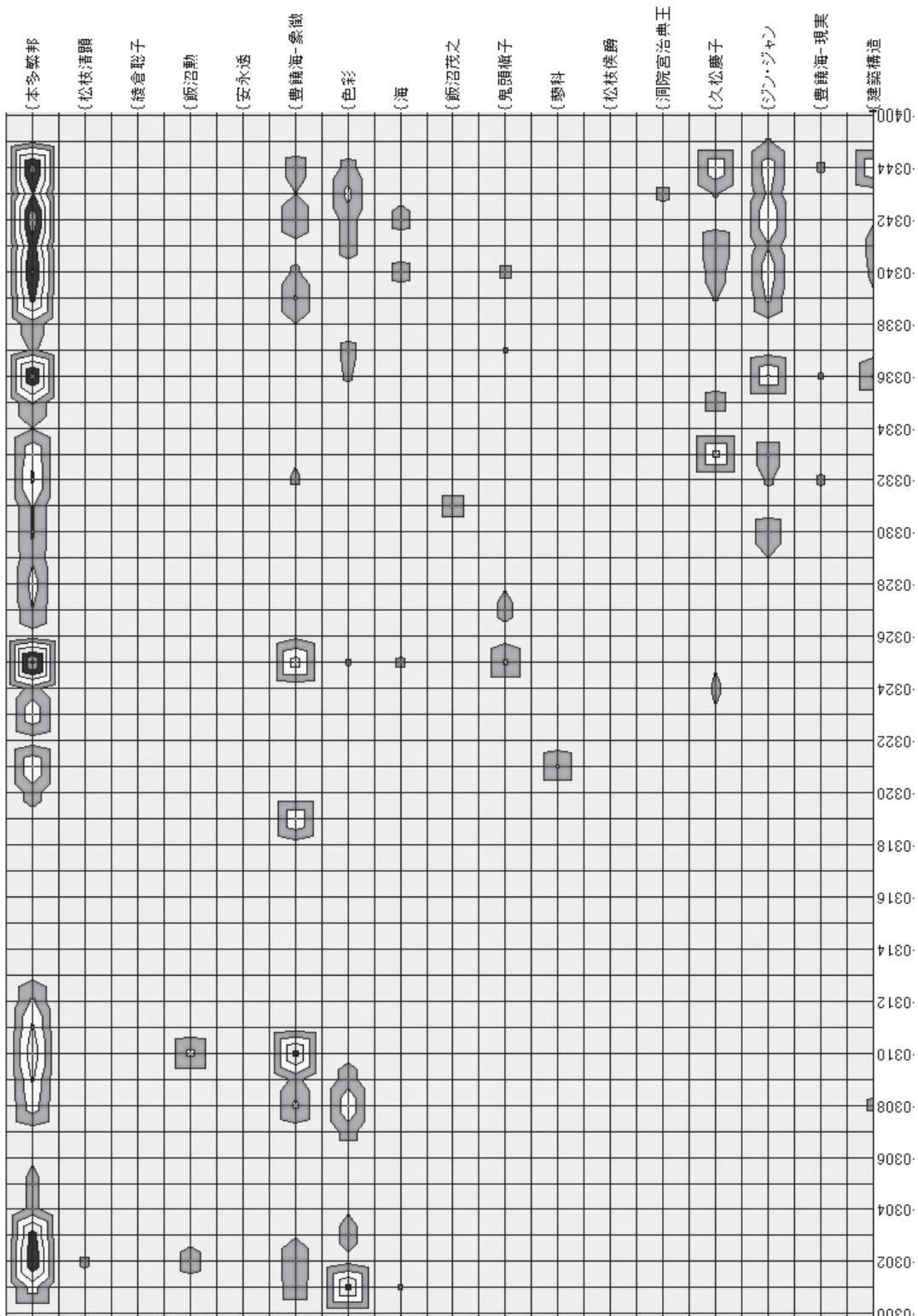


図4-3 文章地図・第三卷『暁の寺』

でに彼を殺していた。雲母を透かして太陽を見るように、若者の乱暴と冷酷の向うに死が透かし見られると、心が休まり、喜びが湧き、哀憐と寛恕に鼻をうごめかせた。そのとき本多は慈悲心というもの公明な残酷さに酔うことができた。かつて何もない広闊な印度の原野の光りに本多の見出した感情はこれだったかもしれない。(『天人五衰』26章)

透は分かりやすい現世の「悪」を激しく本多繁邦に見せている。本多の老醜に対する徹底した暴力・虐めが描かれ、そして世間には「良き養子」として振る舞っている。勿論これは27章で慶子が透に転生の秘密と、透を無意味なただの偽者と論破したことで、透が夢日記を読むにいたり、彼自身の自殺未遂・失明に終わった。

こうした一連の「天使殺し」、偽者暴きというこの世の汚濁を現実的に描ききったあとで、巻は最終章に導かれる。もちろん死期を悟った本多が聡子門跡のいる奈良帯解の月修寺を訪れた時、聡子との面談を得た後で本多に訪れた生のまとめは、ただ「空(くう)」であった。

これと云って奇巧のない、閑雅な、明るくひらいた御庭である。数珠を繰るような蟬の声がここを領している。

そのほかには何一つ音とてなく、寂寞を極めている。この庭には何もない。記憶もなければ何もないところへ、自分は来てしまったと本多は思った。

庭は夏の日ざかりの日を浴びてしんとしている。……(『天人五衰』最終章)

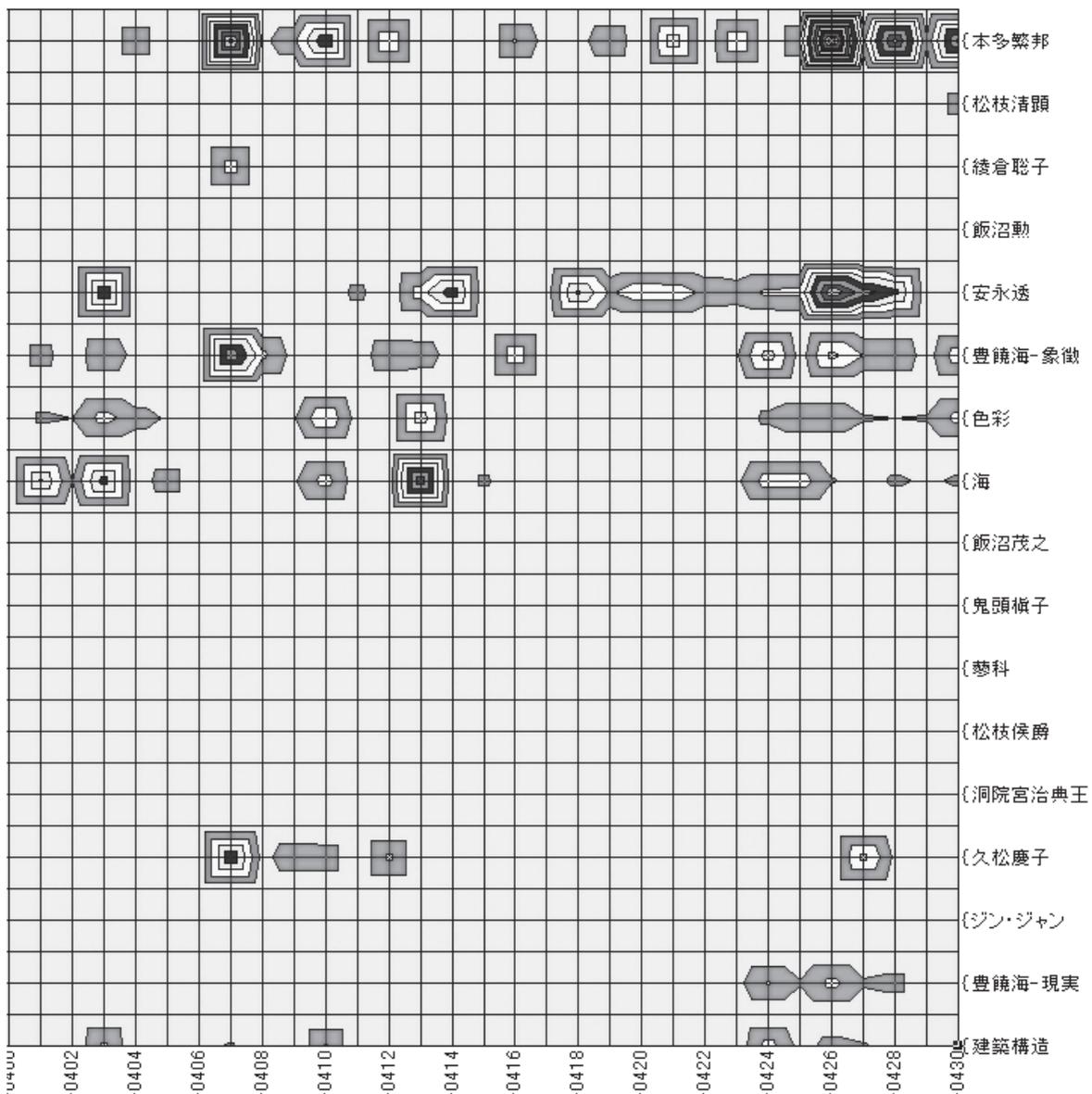


図4-4 文章地図・第四巻『天人五衰』

まとめ

『天人五衰』の小説構造を、登場人物と鍵語によって分析した。登場人物は、正規化（名寄せ）をした時点で、{本多繁邦、松枝清顕、綾倉聡子、飯沼勲、安永透、飯沼茂之、鬼頭楨子、蓼科、松枝侯爵、洞院宮治典王、久松慶子、ジン・ジャン}の12名を選んだ。重要語すなわち鍵語としては、{豊饒海－象徴、色彩、海、豊饒海－現実、建築構造}の5鍵語群を選んだ。

これら人物と鍵語とをクラスター分析、及び地図化によって可視化し、『豊饒の海』全四巻の小説構造について、本論4章冒頭でいくつか述べた。

本論では全四巻を一括して文章地図を造り、それを誌面の都合上各巻ごとにわけて説明することで、本論のまとめとした。各用語の頻度数と文章地図とは全巻に統一があるので、以前の純粹に各巻毎に行った精細さには欠けるが、全体像としては、本論は『豊饒の海』に対する新しい「まとめ」となる。

すなわち全巻を通しての文章地図を作成しそのパターンを見ることで、一般的な読後感がより精密に浮かび上がってきた。『春の雪』では清顕の夢と、綾子との鎌倉「終南別業」での逢瀬がある34章の重要性が文章地図によって明瞭に分かった。また37章の事例では本巻における蓼科の特殊な立場が分かった。

第二巻では37章の裁判場面が核となっていた。ここでは飯沼勲の至誠が鬼頭楨子の偽証によって破壊され、純粹透明な勲が後日にどのような決着を付けるのかという点で、この37章が伏線になっていた。

第三巻のジン・ジャンにも三つ星の黒子があったが、巻末で本多の別荘が全焼することによって、これまでのことをすべて精算した趣があった。この巻は文章地図で分かるように二部構成で、一部は輪廻転生の理論で、二部は本多の別荘が燃え尽きることで現実の破綻を予兆していた。つまり本多は幻想に冷水をかけられたと考えられる。

最終の第四巻は、透の自滅が慶子によって為されたことが文章地図に現れていた。

そして最後の章は、全体量として実に少なく、ただ「空(くう)」であった結論をパターンとして描いていた。

以上から、全巻の起承転結は文章地図によって明瞭に現れたと、結論する。

平成二十四年九月十七日 谷口敏夫 識

